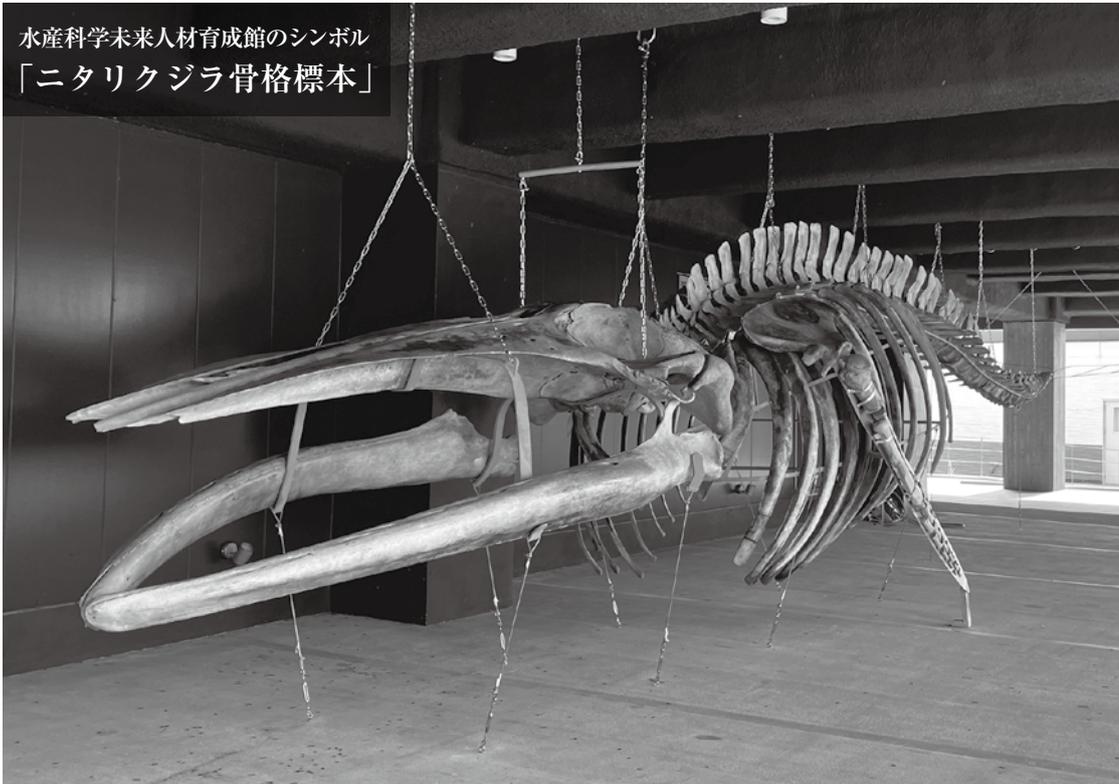


水産科学未来人材育成館のシンボル
「ニタリクジラ骨格標本」



KIBO NO NIJI

きぼうの虹

春号

発行所
北海道大学生協同組合
札幌市北区北8条西7丁目
教職員委員会編集
電話 011-746-6218

主な記事紹介

- 二面・三面 ニホンザルこぼれ話 第15話
- 五面 大学文書館へ行く 第23回
- 七面 SDGs 第8回

令和六年十月、北海道大学函館キャンパスに「水産科学未来人材育成館」がオープンしました。この建物は吹き抜け構造三階建、総面積約二千六百平米、三階に水産科学館、二階に図書館、一階に交流・情報発信のためのフロアが配置されています。

三階の水産科学館の特徴は、博物館の心臓部となる通常非公開の収蔵室を「収蔵展示」の形として整備し、誰もが見学可能にしたことです。収蔵室には明治期に作られた和船模型や漁具資料、そして札幌農学校水産学科時代から蓄積されてきた貴重な研究・教育資料類が収蔵されています。また、貴重な資料のデジタルアーカイブ作業をおこなうマリンメディアラボ、小集会を開くことができるマリンメディアプラザも備え、収蔵品を利用した「生きた勉強」をするための施設がそろうています。

二階の図書館は、一フロアにすべての機能が収まり、使いやすい動線になりました。整備した集密書架により、床面積は減ったものの、所蔵収容冊数は従前の十三万冊から一万冊増えました。図書閲覧用の机と椅子の多くが窓に向かって配置されていますから、学生たちは窓の外の桜の木を見ることができると思います。

一階には発信のためのデジタル機器を備えた広いホールと、ウエットラボ、シヨップが配置さ

さて、札幌農学校において北海道の農学が産声を上げたころ、水産学は先達が参考にした海外の大学にも存在しない学問分野でした。いまでも、海外の大学では海の環境なら海洋学部、食品なら食品学部のように細分化されています。海のことを横断的に学べる「水産学」は、四方を海に囲まれ、豊富な水産資源に恵まれた日本で発達した、「和」の学問なのです。

人と海を繋ぎ未来へ 水産科学未来人材育成館オープン

大学院水産科学研究院
研究院長
研究員
たかぎ やすあき
都木 靖彰



Opinion!

従来から、水産科学館は一般の方も見学できる施設でした。水産・海洋分野の専門図書がそろっている図書館も、調査・研究目的であれば申し込むことによって地域の方も使用できます。ホールやマリンメディアプラザなども同様です(詳しくは水産学部ホームページ内の水産科学未来人材育成館のページをご覧ください)。つまり、水産科学未来人材育成館は大学のためだけに造った施設ではありません。先達が我が国で創り上げてきた水産学の成果を、地域の皆様と共有し、ともに学び、未来に向けて新たな成果を創り出す人材を育成する拠点として整備したものです。地域の皆様とともに、水産学の源流である「和」の心を大切に、未来に向けておこきな成果を創りだしていきたいと思



E z o l i n i K . 風張 喜子
地域個体群研究会
北海道大学SDGs 加藤 悟
北 学 道 書 館 学 井 上 高 聡
北 業 推 進 部 門 教 授

ニホンザル
こぼれ話

■第15話■

EzoLin-K・地域個体群研究会 風張 喜子

さらば、去るサル

北海道の長い冬も、ようやく終わりが見えてきましたね。この時期は、わたしたち日本人にとっては、出会いと別れの季節。進学や就職、引っ越しなんかで、日本中がお別れになりますよね。ニホンザルにとっても、この時期は出会い、そして別れも多い季節です。サルたちの出会いと別れ。それは生と死です。群れに加わる新しい命もあれば、飽食の季節を目前に体力の限界で死んでいく仲間もいます。

とはいえ、実は、わたしたち研究者が、サルが死ぬまさにその時を観察する機会はほとんどありません。不運なアクシデントで群れに戻れなくなつてしまつたり、一時的に群れから少し離れて過ごしたりという例があるにはあるのですが、基本的に、ニホンザルのメスは一生を生きた群れで過ごします。だから、ある日を境に群れの中で姿を見なくなったメスのサルがいれば、「消失」と記録し、死んでしまつたのだらうと推察するわけです。そんなわけだから、目の前で死んでいく仲間に対してサルたちがどうしているのかも、実はほとんど分からないのです。

ある年の3月の末、いつもの群れの中に、よろよろと歩くオトナのメスを見つけました。手足に力が入らないようで、ちよつとした斜面を登るだけでも何度も転んでいます。だいが体力が落ちています。その日の夜中から明け方にかけて息を引き取つたのでしよう。翌朝から、群れの中に彼女を見ることはありませんでした。生前、彼女はよく一緒に過ごしていた妹ザルは、群れの中に姉の姿がなくとも気にならなかつたのか、それとも、それにすら気が付かなかつたのか、はたまた、死んだことを理解できたからなのか。その日、姉を探すつもりもなく、それまでと変わらない様子で過ごしました。



まだ一部の毛が残っているメスザルの死体（閲覧注意!?!）直接の死因かどうかは分かりませんが、大腿骨が大きく割れていました。

誰かが群れの中に見当たらないという状況はそれほど珍しくなく、大騒ぎするようなことではないのかもしれない。例外は、我が子が見つからない時でしょうか。

アカンボウはある程度大きくなると、母親から離れて遊ぶ時間が増えていきます。比較的長距離でも、母親に頼らず、同世代の仲間たちとじゃれ合いながら群れの移動についていくようになります。そんな時、母ザルが、はたと自分のアカンボウがはぐれたことに気がつく、さあ、大変です!

ある日、いつもの群れを探している、なんだか騒々しい集団が近づいてきます。ぱつと見ても、群れの半分もいないことが分かります。いつのまにか群れが二手に分かれてしまったのでしよう。メンバーを確認してみると、どうやら、1歳になつたばかりの子を持つメスザルばかりです。ところが、その1歳のコードモたちが1頭も見あたりません。食事に夢中になつた母たちが置いてきぼりを食つたの

いじわるじいさん

近所で柿の木をみつけた。夏に小さな緑の実をつける。4枚のガクの中の四角い実が可愛い。秋には橙色になつた柿がたわわに実り、冬に裸木になる▼その木の傍で雪かきをしている人がいた。声をかけると、渋柿の木だよ、と教えてくれた。近所の子達が取って食べたけど、口の中がおかしくなつて以来、誰も取らなくなつた。干し柿にすると甘いよ、と▼一昔前の津軽海峡を渡つた旅行が蘇る。列車の窓から、沿線の家々と柿の木が見えた。瓦屋根と柿の木は新鮮で、列島を南下しているのを実感した。その木が今、堂々と雪の中に立ち、枝を広げていた▼言うまでもない。地球温暖化のせいだろう。最近、北海道に縁のなかつたサツマイモが旭川の特産になり、港ではブリの豊漁に沸いた。一方で、寒流魚の秋鮭が不漁だった。長野のリンゴ農家から、高温と大雨でカメ虫が異常発生との悲鳴が届く▼線状降水帯という耳慣れない言葉も何度も聞いた。「今まで体験したことがない」と言つて語られる洪水、土砂崩れ、大雪…。犠牲者が出るような大規模な異常気象が次々と起こることに恐怖を感じる。次はここか、と▼秋には干し柿を作つてみたい。その時、自然災害による犠牲者は出なかつた、と誇りをもって振り返られたらしいのだが。(今日子)

か、それとも、遊びに夢中になったコドモたちがはぐれてしまったのか。どうしてこんなことになったのか分かりませんが、とにかく、群れのもう半分を探しているようです。その季節のお気に入りの食事場所のいくつかを、落ち着きなくめぐり歩きます。最終的には、群れのもう半分に合流し、母子たちは無事に再会を果たしたのですが、どのメスもそれまでずっと、「クワーーーーッ」という口スト・コールを大声で鳴き続けました。騒がしいわけです(笑)。群れが二手に分かれることも、たまにあることですが、これほどの大騒ぎが続くことはなかなかありません。1歳とはいえず、まだまだ幼く世話の焼ける我が子が見当たらない事態、母ザルたちにとっては一大事だったからなのかもしれません。

さて、研究仲間が、ある夏に群れの移動についていけなくなったサルを観察したことがありました。歩けなくなってから数日、朝と夕方にそのサルを見に行っていたそうですが、ほと



思い出のメスザルの晩年



思い出のメスザル、10歳の頃。この時のアカンボウも今は立派な母親です。



思い出のメスザル、2歳の頃。こうしてみると晩年の面影と重なる…?

んど動かずにうずくまって過ごし、そのままその場で息を引き取ったようです。そして、死体には、その日のうちにハエやスズメバチが群がり、数日後にはウジがたくさんわいていて、一部の白骨化が始まっていたとのこと。このような過程を観察する機会はめったにありませんが、きっと多くのサルはこんな道をたどっていくのでしょう。

ところで、わたしの調査地では、発見されたサルの死体は、骨格標本にするためにほとんどが回収されていきました。およそ40年間で150体前後が、骨格標本としてしかるべき機関に寄贈されています。いつもの群れでは、わたしが見てきた二十数年間で、主にアカンボウや年寄りのメスザル、おおよそ70頭が死んでいきました。が、たぶん、そのほとんどが回収されていません。というのも、死体に出会うことがなかなかないからです。

ほとんどなく、沢筋や藪の中などで、ふと足元に目を落とし、た時に偶然見つかることが多いうのです。だから、探そうと思っても簡単には見つかりません。ある時は、回収を頼まれ、大まかな場所を聞いて行って見たものの、冷たい風が吹き抜ける暗い沢筋を2時間も探し回ってようやく見つけることができたのでした。

研究を始めた年に生まれ、初めて名前を付けたメスザルが消失しました。論文に名前が登場したり、このコラムにも何度か顔を出してもらったりと、とても思い出深いサルでした。顔見知りのサルが死んでいくのはさみしいものです。同時に、彼女も、脈々としたニホンザル個体群の動態の一部、そんなもんだと思う自分もいます。なあんだ、そうか、別れの季節は、サルじゃなくてわたしにとって、なのかもしれません。

恐竜研究でモンゴル留学

第3回 恐竜研究でモンゴル留学 ～怒涛のクリーニング編～

北海道大学大学院理学院 自然史科学専攻 地球惑星システム科学講座
日本学術振興会 特別研究員DC2
博士2年 大藪 隼平



12月14日。ついにモンゴル生活も最終日を迎えた。ウランバートルはすっかり冬本番であり、日中でも-10℃を下回る。もはや業務用冷凍庫の中である。真っ白な息が出る中、最終日もいつもと変わらず研究所に向かった。標本整理や掃除、片付けをするためだ。部屋を綺麗にしなが、半年間の作業を思い返していた。

このモンゴル留学では、いくつか研究をさせてもらったのだが、メインに据えていたのが化石のクリーニング作業だった。何の化石をクリーニングしていたか?というところ、シルートウラという、おそらくバインシレ層(約9千万年前)が露出している地域から発見された鎧竜類の体骨格化石である。この地域はロシアや日本の調査隊が数度調査しているものの、ほとんど発掘調査は行われていない。そのため、その恐竜相については分かっていないことが多い。また、同じ時代にモンゴルから発見されている鎧竜類は、他の時代に比べ体骨格の情報に乏しい。この標本は頭骨と尾のハンマーを除けば骨要素が揃っており、状態が良いことも分かっている。もしこの標本の全貌が明らかになれば、シルートウラの恐竜相を理解するのに一役買うことができ、



【写真1】愛用したエアスクレイパー。先端の針が高速で振動しており、簡単に岩石を削ることができる。



モンゴル産鎧竜類の体骨格進化も同時に理解できる。したがって、この標本は重要であり、クリーニングをしてまで研究する価値がある(と筆者は考えている)。

こうして取り組んだクリーニングであるが、その手順を簡単に紹介する。まずジャケットをナイフや電動カッターでこじ開ける。次に、大まかに化石の周りの岩石をタガネやハンマーで取り除く。その後、エアスクレイパー(写真1)でゆっくり化石近くの岩石を削りとり、化石を取り出す。ただし、エアスクレイパーを用いても、骨同士が幾重にも重なり合っている複雑な部分や薄く小さい化石の取り出しは困難を極める。このような場合は細かい作業に向けたデザインナイフを用いて少しずつ岩石を削りだしていく。他にも、固結度の高い岩石にはアセトンや酢酸を用いて柔らかくしたり、パラロイド溶液(接着剤のパラロイドをアセトンに溶かしたもの)を化石に垂らし、固めて保護したりしている。このように、様々な道具や化学薬品を駆使しながら、大胆かつ慎重に化石を取り出していくのだ(写真2)。

ほぼ半年かけたクリーニング作業によって、大小計12個のジャケットから化石を取り出した。その結果、体骨格の骨要素(上腕骨、尺骨、肩甲骨、胴椎、肋骨、腸骨、坐骨、大腿骨、足の指骨、尾椎、皮骨)が姿を現した(写真3)。初めてこの鎧竜類の全貌が見えた。これだけでも大満足である。しかし、ここで終わりではない。パッと見ただけでも、上腕骨・尺骨や大腿骨は明らかに他のモンゴル産鎧竜類と形が違う。これらの形態の違いは成長段階の違いによるものだろうか。それとも種の違いを示しているのだろうか。北米産の鎧竜類と共通点・相違点はあるのだろうか。まだまだ検証することがたくさんある。ここからが研究の本番だ。

12月15日の早朝。チンギスハーン国際空港に着いた。搭乗ゲートで飛行機の出発を待ちながら、これからの研究人生をふと考える。たくさんの化石と触れ合いながら、自分の手で、恐竜の生き生きとした姿を描き、進化の過程を紐解いていたい。そんな自分の研究でみんなが楽しんでくれたら……。そうなるにはまだまだ未熟だなと思いながら、飛行機に乗り込んだ。長いようであつという間だったモンゴル生活。ありがとう、またいっくね!



【写真3】今回クリーニングした鎧竜類の復元図 (park et al. (2021) の図を一部改変)。出てきた部位を白色で示している。

大学文書館へ 行こう

第23回 「クラーク胸像が消えた」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



戦前のクラーク胸像と中央講堂

戦時の銅像献納

クラーク胸像は、一九二六年の北海道帝国大学創基五十周年記念事業の一環として、札幌同窓会（農学部同窓会）が計画し、同窓生を中心とした寄附金により設置されました。設置場所は現在と同じ位置です。当時は現在のクラーク会館の北側の中央分離帯がある道路には、中央講堂という、入学式や卒業式などの全学的な式典や講演会・音楽会などを行なうホールと総長室などを備えた建物が建っていました。大学の中心であった中央講堂の入口の脇に位置するクラーク胸像は正にシンボリックな存在でした。

は国宝以外のものを戦争遂行のために供出する方針であることを説明した結果、評議会は文部省の指令があれば壮行会等を行なって銅像を供出することを決めました。そして、「青葉先生像」（物理を担当した予科教授・主事青葉萬六を記念し予科図書室に設置）、「佐藤男爵像」（初代総長佐藤昌介の勇退後、中央講堂玄関正面に設置）、「今総長胸像」（医学部長を歴任した当時の今裕総長の還暦を記念して医学部中庭に設置）、「乃木將軍胸像」（個人が寄附し附属図書館に設置）と共に、クラーク胸像も供出することになりました。六月二十五日付け『北海道新聞』は「ボーイズピアムピシヤスと本道開拓の熱意に燃ゆる当時の農学校生徒を激励した米人クラーク



クラーク胸像不在の台座（1948年8月）
佐藤昌彦農学部助教と占領軍兵士

この事件の顛末は、井上の回想とはやや異なるようです。二〇一五年三月四〜六日付け『北海道新聞』が「少年よ大志を抱け」クラーク胸像の帰還

の胸像が米英打倒に応召するのにも皮肉」と胸像献納を伝えています。翌二十六日、中央講堂前で、五体の銅像に縁のある人々、総長・学部長、学生生徒などが出席し、諏訪神社社司を招いて神式の「銅像献納奉告祭」を実施しました。クラーク胸像を盗み出せ

ところが、クラーク胸像の献納をめぐってはちよっとした事件があったことを、井上泰男文学部教授（西洋史）が、一九六六年二月十日付け『北海道大学新聞』に、「クラーク博士」二題」と題して発表しました。胸像献納当時、予科生だった井上の同期の友人たち数名は、中央講堂に保管してあったクラーク胸像を、「盗み戦争が終るまで彼らの手で守りつづけよう」と計画したけれども、「胸像は予想以上に重く、これらの安全な家まで運び去ることはできなかった」、さらに、「翌日、人々は再びものと台座にクラーク像が毅然としてそびえているのを見出す」と、一時台座の上に戻された」と記しています。



クラーク胸像再建の記念スタンプ（1948年10月）

と題しクラーク胸像献納を取り上げた特集記事を連載しました。この中で、「重くて持ち出せなく、（中央講堂の）物置かどこかにぶち込んでおいたんだ」という、クラーク胸像盗み出しに加わった張本人の言を紹介しています。献納の際の大学の調査ではクラーク胸像の重さを三〇〜六〇キログラムと推定しています。重くて中央講堂から盗み出せず、放置したというのが事実のようです。胸像は滞りなく供出され、台座だけが取り残されました。

クラーク胸像の帰還

クラーク書籍便り

Vol.22

6位『同志少女よ〜』は著者デビュー作で22年本屋大賞受賞作の文庫化。10位『調査する人生』は「人生をかけて、相手の人生を聞く」フィールドワーカーたちの「調査する人生」を語り合う本。著者7人の掲載図書はすべて店の該当棚に常備してきたものだったので、思わず「やったね」と（笑）社会調査の方法を論じた書という枠を大きく超える「読んでワクワクする本」で、元北大教員石岡丈昇氏の章も読みごたえがあります。

クラーク12月・1月一般書ランキング

書名	著者名	出版社	書名	著者名	出版社
1 TOEIC L&R TEST 出る単特急金のフレーズ	TEX加藤	朝日新聞出版	6 同志少女よ、敵を撃て	逢坂冬馬	早川書房
2 宗教と政治の戦後史	櫻井義秀	朝日新聞出版	7 政治的神学	カール・シュミット	岩波書店
3 民法4	山本敬三	有斐閣	8 香君4	上橋菜穂子	文藝春秋
4 地方消滅2	人口戦略会議	中央公論新社	9 限界の国立大学	朝日新聞「国立大の悲鳴」取材班	朝日新聞出版
5 まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書	阿部幸大	光文社	10 調査する人生	岸政彦	岩波書店

心とからだ健康を考える

大学院教育学研究院 准教授

渡邊 誠



この『おもかげ復元師』という本のは何度か触れたことがあります。二〇一一年三月一日の東日本大震災の後、損傷の激しい遺体を生前の姿に修復し、家族をはじめとする故人を送る人たちが、心おきなく悲しみ、別れを告げられるようにするという仕事をボランティアで行った、納棺師の方の記録です。小さな本に、人が人の死を悲しむということが、あふれんばかりに詰まっています。しかしこの本の特徴は、あたかも現世を突き抜けて天上の世界にまで達するような何かを示していることだと思えます。

私たちは普段はなんとなく、目に見える、形のあるもの世界に生きているように感じているのではないのでしょうか。それは現代社会の特徴なのかもしれません。そして、目に見える、形のあるものを究明し、操作するのが科学技術なのだと思います。その威力たるや物凄いもので、想像もつかなかったようなことが次々に実現されてゆきます。無限の可能性があるとさえ思えます。私たちはその恩恵に、日々浴しています。でもそこには、思いがけないような、大きな落とし穴があるのかもしれない。

ちょうど今から三十年前の、一九九五年に地下鉄サリン事件が起こりました。狂信的なカルト集団であるオウム真理教の幹部信者が、猛毒のサリンを生産して東京の地下鉄内に散布し、多くの人を殺傷した世界で犯罪史上稀に見る、凶悪な無差別テロ事件です。特徴的だったのは、罪に問われた教団幹部の多くが、非常に優秀で真摯な理系出身の青年だったことです。しかし、どうしてそういった優秀で真摯な青年たちが、犯罪史上稀な残虐行為に加担したかは、解明されないままに、死刑が執行されました。地下鉄サリン事件はいまだに終わっていないのです。

こころの健康を考える 88

こころの健康ブック・レジャー・プラス
笹原留似子『おもかげ復元師』と形のない大切なもの

でも、この本は禍々しい本ではありません。むしろ真逆と言っている澄明な世界に通じる本です。私の知る最も悲しい本でもありません。悲しむことが必要な時、この本はきつと力になってくれると思います。悲しむことは、力になります。

私たちが身近にあって、目に見えない、形のない、でも大切なものを体現しているものとしては、音楽があるでしょうか。そして、日本以外の多くの文化圏では、それに加えて信仰があるのではないかと思います。地下鉄サリン事件が、明確な信仰を持つ人の割合が少ない日本という国において、しかも狂信的な宗教教団によって起こされたということには、必然性があるのかもしれませんが、理由が究明されていないという事は、繰り返されるかもしれないということ。学生の皆さんの優秀なレポートを読んだ後、ふつと地下鉄サリン事件のことが脳裏をよぎることがあります。それが杞憂だと言う勇氣を私は持ちません。出口が必ずあるということとは信じられるのですが。

ほけんのお話

平成18年に福岡県で発生した、幼児3人が死亡した飲酒運転事故を覚えていらっしゃるでしょうか。この事故を契機に、厳罰化や行政処分強化、各方面での取り組みが進んだ結果、飲酒運転による事故件数はかなり減少しました。しかし、警察庁のデータによると、令和5年の飲酒運転による事故は2,346件、死亡事故は112件に上り、依然として飲酒運転による死亡事故が発生しています。

出先で酒を飲んで運転して帰る、自宅で飲んでいて近くに買物するため運転するなどいろいろなケースがあるので、事故になっていないだけで、実際には飲酒運転をしている人は意外と多いのではないのでしょうか。酒に強いから、少しだけだから、時間が経ったからと「私は大丈夫」と思っている人も、アルコールが入ると判断力や反応速度、視力・視野が低下し、速度超過や信号無視といった無謀な運転や普段では考えられないような運転ミスを引き起こし、それが事故に繋がるのかもしれない。飲酒運転の死亡事故率は、飲酒していない場合に比べ約61倍高いというデータもあり、被害者の遺族は納得できる話ではありません。

飲酒運転事故の加害者となった場合、厳しい罰則や行政処分、社会的信用の失墜、失職などの社会的制裁、高額な賠償責任が課せられ、自動車保険においては、人身傷害保険や車両保険、関連する特約に酒気帯び運転が免責となるため、自分自身の治療代、車の修理費用などが自己負担となります。保険会社が支払った賠償金について後から請求される場合もあります。加害者になるということは、それだけ大きな覚悟が必要です。「被害者救済」の観点から、被害者には自賠責保険や任意自動車保険の対人・対物賠償、人身傷害保険が適用されます。

みんなで「飲酒運転を絶対にしない、させない、許さない」という意識を再確認し、行動したいものです。



飲酒運転禁止

SDGs

連載 第8回

「私たちが与えた7つのインパクト」

北海道大学SDGs事業推進部門 教授 加藤 悟



2024年度を振り返ってみます。個人的にインパクトの高い順に7つあげてみます。

① タイで開催されたGlobal Sustainable Development Congress2024に参加（6月）

THE (Times Higher Education) が主催する高等教育機関のトップ層が参加する国際会議。世界の最新の動向を肌で感じることができました。このコラムでもoptimismの話を書きました。

② Hokkaidoサマーインスティテュート「北大フィールドサマースクール」開講（6月）

金・土・日の3日間連続で、札幌キャンパスの北海道大学ワイン教育研究センターでの講義、苫小牧研究林での見学・演習、余市果樹園での見学・演習を行う科目を実施しました。余市果樹園から平川ワイナリーまで足を伸ばして、ブドウ苗の手入れや、平川敦雄さんからワイン文化のお話を聞くなど充実した科目となりました。2025年度はNIKI Hills Wineryの見学も行います。（6月27日～6月29日開催）

③ 「Hokkaido 海のクリーンアップ大作戦！ vol.4」に参加（5月）

生活協同組合コープさっぽろが事務局を務める北海道SDGs推進プラットフォームが主催する標記のイベントに、北海道大学の学生・教職員チーム51名を編成し、厚田海岸での清掃活動に参加しました。京都の川や大阪湾での同様の活動には参加しましたが、北海道では初めての活動。流木や海藻が多いのが北海道の特徴と認識しました。全国共通ですが、プラスチックごみの多さに閉口しました。（本年は5月17日）



<清掃を行った厚田海岸>



<MIND食ランチョンセミナー>



<給水スポットのイラスト>

④ 苗穂・本町地区センターで「MIND食ランチョンセミナー」を企画・開催（9月）

札幌市には、区民センターと地区センターがあって、これが異なるものであることを今回知りました。区民センターは行政による直接管理で、地区センターはそれぞれの地域に運営を任せています。そのため地区センターの活動の自由度が高い。今回は、生活習慣病に実践的に取り組みたいとの要望を受け、北海道大学病院栄養管理部の協力を得ながら、脳の老化を遅らせる効果が期待される食事法である「MIND食」についての講義と実食を行いました。参加者のアレルギー問題や、食事の嗜好などもあり、運営は気を使いましたが、地域に貢献したという充実感が得られました。

⑤ WOMAN EXPO 2024 Winter（東京ミッドタウン）で北大ブランドを紹介（11月）

日本経済新聞社・日経BP主催のイベントにブース参加して、食に関する北大ブランド品の試飲・試食を提供しました。北海道といえば「食」。北海道大学だって、札幌農学校のクッキーだけじゃない！ことをアピールしたくて行ってきました。北大の「リジェネラティブ」にこだわる短角牛や牛乳、農家の少子高齢化を見越して品種改良に取り組んだ「北大ラズベリー®」などの紹介をしてきました。来場者の熱気に驚きました。

⑥ ウェルネス推進プロジェクト「H-ARTs（ハーツ）」で「無料で健康チェック！」を定期実施

アークスさんの店舗スペースを活用し、ツルハさんの健康測定機器をお借りし、札幌市さんのネットワークや、地域包括支援センターと介護予防センターの協力、さまざまな民間企業さんから食品や飲料の試供品を提供いただくなど、全てを持ち寄りで開催するイベントが軌道に乗っています。参加者さんのリピート率も高く、一つのモデル事業として大成功しています。2025年度の第1回は6月1日（日）、スーパーアークス北24条店で開催します。

⑦ 北大生協の北部食堂に「浄水型ウォータースタンド」を設置（11月より）

北海道大学でもマイボトルをサポートしたいと思っていました。神戸大学さんは日本コカ・コーラ社さんと「ボナクアウォーターバー」を試験設置していましたが、北大では水道水栓直結型を模索し、北大生協さんと大学が少々の負担をすることで給水スポットを設置することができました。夏に向けてどんどん利用して欲しいと思っています。

2025年度は新学習指導要領となった学生が入学してきます。総合的な探究の時間で「課題解決」を習得した学生です。5年連続SDGsで国内1位を獲得している大学に恥じないようにしたいと思います。

北大生協には「学生・院生・留学生・教職員」の4つの組織委員会があります。

北大生協組織委員会報告

学生委員会

■共済 健康企画「ベジチェック」

1月14日(火)の11:30～14:00に北部購買にて健康企画「ベジチェック」を開催しました！手をかざすと野菜の摂取状況が分かる機械を用いて、組合員自身に食生活を見直してもらえそうな内容で実施しました。当日は110人の方に参加いただき、ベジチェックのスコアを記録できるベジカードの配布や野菜ジュース、朝食レシピの配布を行いました。今後も定期的な今回のような企画を行い、健康について考えてもらう機会や共済について知ってもらう機会を増やしていきたいです。



院生委員会

■北部食堂のエリア名が決定しました！

前号でお知らせした北部食堂のエリア命名企画に関して、エリア名が決定しました。アイヌ文化に関わりの深い動植物のアイヌ語名を、「陸の動物」「草花」「樹木」「海の動物」の4ジャンルから計9種類選定しています。

- 陸の動物
ウンマ(ウマ)
サロルンカムイ(タンチョウ)
- 草花
ハシカブ(ハスカップ)
キキンニ(ナナカマド)
- 樹木
アンラコロ(クロユリ)
マウニ(ハマナス)
- 海の動物
ピサシ(カキ)
アンパヤヤ(カニ)
スサム(シシヤモ)

エリア名を示すイラストとマップは鋭意制作中です！今年度中の掲示開始を目指していますので、お楽しみに！

■「いんでないかい」完成しました！

新入院生に送付する情報誌「いんでないかい」が完成しました！内容は北海道・札幌の紹介、北大や北大生協、大学院の生活についてなどで、生協の資料請求をしてくださった方にお届けする予定です！

留学生委員会

■北大多文化交流サークル(HMCC)と共同でイベントを開催しました

留学生と日本人学生を対象に、日本語により親しみでもらう機会を増やすための、日本語交流イベントを開催しました。議題を決め、複数のグループに分かれ日本語で話し合いをしてもらう機会を設けました。



■雪像制作イベントを開催しました

「北海道」をお題として4人1組のグループで雪像を作り、その大きさや美しさ、お題を反映できているかを基準として勝者を決める雪像制作のイベントを開催しました。5グループが参加し、北大構内にて約40分かけて雪像を制作し、勝利したチームには景品も授与されました。



教職員委員会

■教職員総代会議…12月10・11日、2月12・13日の昼休みにWeb会議により開催しました

11～1月期の決算報告書、今後の店舗の営業時間、北部ウコトイセ店についてのご意見を頂きました。今後も総代会議でさまざまなテーマでご意見をいただければと思います。引き続きどうぞよろしく願います。

■教職員委員会…12月13日、2月13日定例会議を開催し、きぼうの虹の編集および総代会議での意見について話し合いました。

■「きぼうの虹」…この冊子です。毎回Onlineや特集ページなどで、多くの教職員の方にご寄稿をいただいています。

【編集後記】

4月は出会いと別れが交錯する特別な季節です。4年生の副担任をして3年目になりますが、これから新たな道を切り開いていく卒業生の背中を見送りながら、感慨深い気持ちになります。一方、新入生の皆さんは、北海道大学での新しい生活に期待を膨らませていることでしょう。新たな仲間や学びの場が待っており、素晴らしい経験が広がっています。そんな中、北大生協は、新入生や教職員の皆様に、ぜひ組合員としての加入をお願いしたいと思います。生協では、食堂や購買での食の提供はもちろん、就職活動や資格取得、教育研究活動の支援も行っています。皆さんにとって、4月が新しいスタートを切る素晴らしい月となることを願っています。